



マダガスカルにおける稲作技術の複数性

1.) マダガスカル＝稲作・米食＝アジアの伝統、と結びつけて語られることが多い。しかし、**マダガスカルに最初にやって来たアジア系の人びと(5世紀?～8世紀?)が、稲作技術を携えていたか否かは不明。**

- 2.) マダガスカルにおける稲作には、**3つの異なる技術系統**がある。
- a. 焼畑＋陸稲(ジャワニカ米)＋点播＋穂刈り/打ち付け脱穀
 - b. 水田＋水稻(インディカ米)＋踏耕/鋤耕＋移植＋根刈り＋打ち付け脱穀
 - c. 水田＋水稻(インディカ米)＋踏耕＋散播＋根刈り＋牛蹄脱穀

これら複数の技術系統は、異なる地域からの人びとが、異なる年代にマダガスカルに稲作を持ち込んだことを示している可能性が高い。

3.) 「**稲作以前**」の段階の農耕を想定する必要がある。その時の重要な農作物は、バナナ・ヤムイモ・タロイモ・ココヤシ・サトウキビなど。

マダガスカルにおける稲作の歴史的展開

- 1.) 10世紀から12世紀頃、新しくやって来たインドネシア系集団もしくは「アラブーイスラム」系集団が、島の北西部から北東部にはじめて稲と稲作をもたらした。
- 2.) それらの人びとの島内での移動に伴い稲作は、ヨーロッパ人たちが島に来た16世紀までに、東部海岸一帯と北西部海岸一帯に普及した。
- 3.) 中央高地に居住していたメリナ系の人びとが、東部海岸ないし北西海岸から稲と稲作を受容し、王を頂点とする政治統合を基盤に大規模公共土木工事をを行い、16世紀頃から水田稲作を急速に発展させた。
- 4.) 18世紀までに稲作は、年間降水量800ミリを下回る島の南西部から南部一帯を除いて、広く行われる様になり、牛や奴隷とともにマダガスカルからの海外との主要な交易品となった。
- 5.) 19世紀のイメリナ王国の島内各地の征服に伴う領土の拡張とメリナ系の人びとの入植は、灌漑稲作法を各地に普及させた。
- 6.) 20世紀にはいり、「植民地の平和」の許で東南海岸部に住み人口の増加圧を生じていたアンタヌシ系やアンタイサカ系の焼き畑耕作民の人びとが、土地を求めて人口の希薄だった西部から西南部一帯に移住をはじめ、それに高地のベツイレウ系の人びとも加わってこの地方での稲作が進み、ほぼマダガスカル全島を稲作の風景が覆うようになった。

出典: J.F. Bourdieu, *L'homme et le paysage du riz à Madagascar*, 1976.

アフリカ起源の栽培作物の少なさの謎

右の写真(Majunga州北西部)に見られるように、マダガスカル人にはアフリカ黒人系形質が卓越している場合が多い。

しかしながら、マダガスカルにおけるアフリカ系の人びとの起源は、18世紀～19世紀に対岸のモザンビークから奴隷として連れてこられた人びとを別にすれば、ほとんどわかっていない。

それと共に、マダガスカルの栽培植物には東南アジア・南アジア原産のものが多く、アフリカ産の栽培食物は数が少ない上、現在の食生活において果たす役割も小さい。



アフリカから渡来した栽培作物

ヒョウタン(Majunga地方北西部) ヒョウタンにはアフリカ系とアジア系があり、マダガスカルには両系が存在する。このほかにも、**ゴマ・スイカ・ウリ**はアフリカから渡来したものと推定される。

モロコシ(ampemba) (Antananarivo地方)



東部地方における焼畑と水田



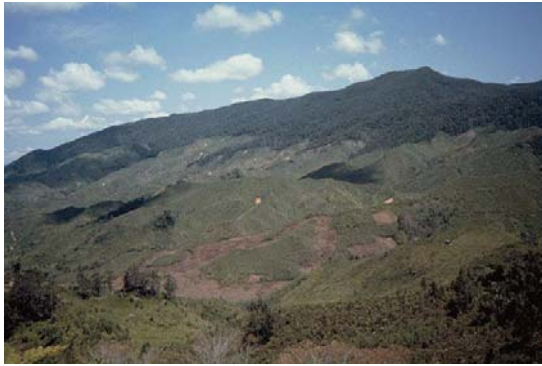
Tamatave地方における土地利用景観



Tamatave地方における土地利用景観 谷地に水田が拓かれている



Tamatave地方における土地利用景観
焼畑と二次林と処女林



10

Tamatave地方における焼畑



11

Tamatave地方における焼畑



12

Tamatave地方における焼畑



13

Fenoarivo地方の土地利用景観



14

Fenoarivo地方の土地利用景観



15

Fenoarivo地方の土地利用景観



16

Fenoarivo地方の焼畑



17

Fenoarivo地方の焼畑



18

Fenoarivo地方の焼畑



19

Fenoarivo地方の焼畑



20

Fenoarivo地方の焼畑



Fenoarivo地方の焼畑



22

Fenoarivo地方の低地水田



23

Fenoarivo地方の村落景観



24

Fenoarivo地方の村落景観



Fenoarivo地方の村落景観



26

Fenoarivo地方の村落景観



27

Fenoarivoの町の市場



Moramanga地方
市場におけるタロイモとタロイモの茎



Moramanga地方
栽培ヤムイモ



Moramanga地方のBezanozano系の人びと



Moramanga地方の低地水田



Tanala地方の焼畑と高倉



Manakara地方の水田稲作
蹄耕を終えた平地水田



Manakara地方の水田稲作
蹄耕



Manakara地方の水田稲作
蹄耕



Manakara地方の水田稲作
谷地水田における田植え



Manakara市内の市場



Manakara市内の市場



Manakara地方の焼畑により荒れた後背地



Vangaindrano地方の水田稲作



Vangaindrano地方の高倉と米搗き



Vangaindrano地方の高倉に貯蔵されている稲穂と穂刈ナイフ

東部の焼畑稲作地帯では、画像のような小型ナイフで穂刈し、穂だけを高倉に貯蔵している場合が多い。

中央高地を含めた水田稲作地帯では、鎌を用いた根刈りが行われている。

また、飯の炊き方も、マダガスカルでは湯取り方式と炊き上げ方式の二つがある。



中央高地における水田



Antananarivo地方の遠景
AmbohimangaからAntananarivoを望む



Antananarivo地方における低地水田稲作



Antananarivo地方における低地水田稲作



Antananarivo地方における低地水田稲作



耨型鋤による耕起

Antananarivo地方においても18世紀までは田拵えとして牛による蹄耕(踏耕)が行われていたものの、畔を壊すことが多いとして、18世紀に当時の王によって禁止されている。

現在Antananarivo地方においては蹄耕はほとんど行われておらず、耨型鋤(angady)による耕起や土壌粉碎が普及している。



Antananarivo地方における低地水田稲作



Antananarivo地方における低地水田稲作



Antananarivo地方における低地水田稲作



Antananarivo地方における低地水田稲作



Antananarivo地方における低地水田稲作



Antananarivo地方における低地水田稲作



Antananarivo地方における低地水田稲作



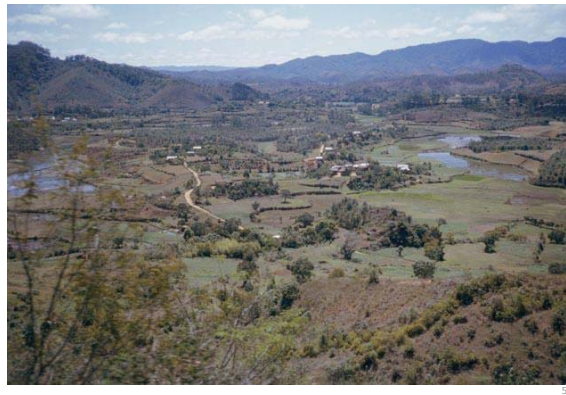
Antananarivo地方における低地水田稲作



Antananarivo地方における土地利用景観



Anjirio地方の土地利用景観



Anjirio地方の土地利用景観



Anjirio地方の土地利用景観



Ambatondrazaka地方における水田稲作



Ambatondrazaka地方における水田稲作
踏耕



Ambatondrazaka地方における水田稲作
踏耕



Ambatondrazaka市内の市場
種子を売る露店



Ambatondrazaka市内の市場



Ambatondrazaka市内の現地食堂



Ambatondrazaka市内の現地食堂



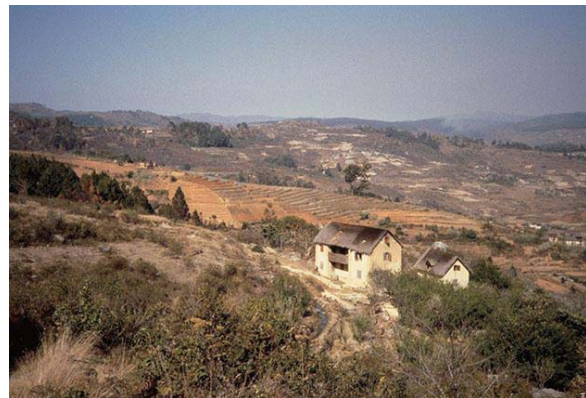
Antsirabe地方における水田稲作



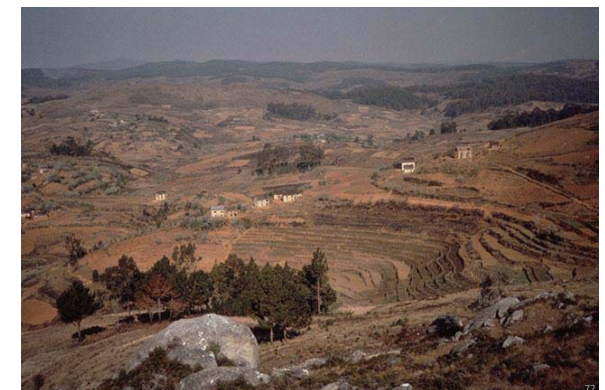
Antsirabe地方における水田稲作



Fianarantsoa地方における棚田耕作



Fianarantsoa地方における棚田耕作



Fianarantsoa地方における棚田耕作



Fianarantsoa地方における棚田耕作



Betsileo系の人びと



Betsileo系の人びと



北西部における開発水田



フランス植民地時代に整備された水田
Marovoay地方



フランス植民地時代に整備された水田
Marovoay地方



フランス植民地時代に整備された水田
Marovoay地方



<生存>世界と「緑の革命」

北西部地方の水田における刈り入れ後のにお



「緑の革命」とは？

- 1) 目的: 穀物の多収穫品種を育成し、灌漑、肥料、農薬、農業機械などの技術革新により、発展途上国の伝統的農法を脱し、食糧増産をはかり、その食糧問題を解決すること。
- 2) ロックフェラー財団・フォード財団の援助により;
1962年フィリピンに**国際稲作研究所(IRI)**設置。
1963年メキシコにトウモロコシ・小麦改良センター設置。
- 3) これらのセンターが、開発した多収穫の稲や小麦の品種を、**1965年ー1966年頃**から、世界の発展途上国に普及する活動を開始。
⇒ 肥料を含めた基盤技術の問題・高収穫品種のもつ弱点の問題・食糧をてこにしたアメリカの世界戦略の一環を担うと言う政治的問題(東南アジアや中南米の共産化の脅威への対処)。

82

マダガスカル語における「農民」概念の不在

- 1) **Mpamboly** : mamboly「栽培する」の行為者形。〈栽培者〉の意。
- 2) **Tantsaha / Mpamokatra** : Tantsahaは、saha「谷」、「畑」、「田舎」を語根とし、〈農民〉、〈田舎者〉の意。Mpamokatraは、mamokatra「生産する」の行為者形。〈生産者〉の意。Tantsaha mpamokatraとは、「田舎に居住して生産を行う人」=〈農民〉の意。

*Tantsahaとmpamokatraの単語は、1972年からのRatsimandrava内務大臣(1975年の国家首班)によるfokon'olona改革および第二次共和制下で1976年のBankin'ny Tantsaha Mpamokatra 略称B.T.M.、現在のBank of Africaの前身、「国立農業銀行」の設置以降、一般に用いられ始めた。

*マダガスカルでは、職業に基づく階層性や身分が未発達であったため、自分たちがことさらに「農民」であると意識したり、名乗ったりすることがない。Mpambolyの単語も、「何を栽培する人なのか?」については何も指示してはいない。

83

北西部地方における「生存」の観念

北西部地方における **velon-teña** ≡ **fivelomana** 「生計」・「生業」
≡ **fiainana** 「生活」・「暮らし」

velon-teña = **velona**「生きている」+ **teña**「身」・「自身」
⇒「生計」・「生活」・「生存」・「暮らし」・「やりくり」・「身をたてること」

用例: Mahaisarotra ny velon-teña. 「生活がますます苦しくなる」

Atao karakôry tôy velon-teña tôy? 「どうやって生活してゆこう?」

Inona ny velon-teñaazy? 「彼(彼女)の生業は何だ?」

*「生存」や「生計」、「生活」の観念は明確に見出されるが、**velon-teñaは特定の形を有していない上、特定の目的も設定されていない。**

84

マダガスカル島と調査地



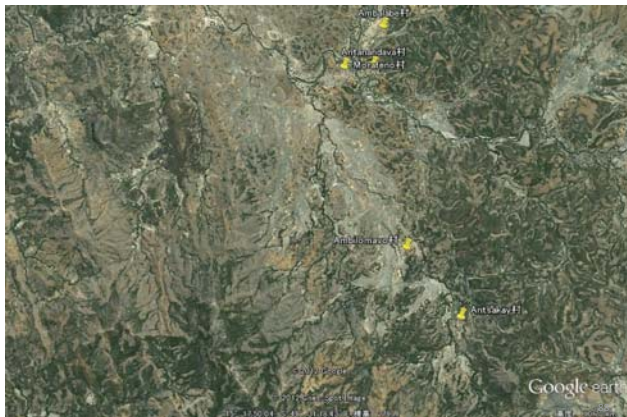
調査地の50万分の一地図



調査地の5万分の一地図



調査地の衛星画像



マダガスカル北西部地方における土地利用の景観 1 Mandritsara地方 1983年

山間部の村落と耕地
谷地が水田として利用されている。丘陵の斜面は焼畑地としても利用される。

平地部の村落と耕地
散播のため水田には畔が造られていない。川の近くには菜園が造られている。



90

マダガスカル北西部地方における土地利用の景観 2
Antsohihy地方 2005年

乾期に野火が入ったため、景観全体が灰色になっている。

大半の水田には畔が造られ、移植のための湛水田となっていることがわかる。一方、現在でもまだ畔の無い水田区画もあり、散播稲作がこの地方では無くなってはいない。

移植湛水水田も、畔の方向が不規則であり、畔の無い散播水田から造りかえられたことがわかる。



マダガスカル北西部地方における土地利用の景観 3
Befandriana地方 2006年

平地は少ないが、低地は水田に、丘陵地は焼畑に、河川の近くは<畑>や菜園に多角的に利用されている。低地で標高300m、山の頂上で1200m。

平均年間降水量は1300mm前後だが、雨季(asara)12月~3月と乾季(main-tany)4月~11月の区別が明確である。



マダガスカル北西部地方における土地利用の景観 4
Befandriana地方 2005年

乾季のため減水しているが、中央の池は雨季には手前まで拡大する。このような雨季と乾季で増水と減水を繰り返す池の周囲も、古くから水稲栽培地として利用されてきた。

また、乾季でも枯渇しない池の周囲には、河川の近く同様、菜園が造られることも多い。

河川はムラの管理下にある一方、池沼には所有者がいる。ただし、その所有権は、池沼に生息する食用の魚・昆虫・カメの捕獲および池沼周辺に生育するカヤツリグサ(zozoro)の採取に限られ、水利権は付与されていない。



食事に見る<生存>の形

農繁期の出づくり小屋における食事
ご飯・白インゲンと牛肉・お焦げ湯

<生存>に基づいた食事の体系 1

Sakafo/Hanina : 「食事」/「食べ物」

Hanin'mangitra : <芳しい食べ物> = ご飯
(hanin'manitra) (hanim-potsy)

Hanim-boroka : <臭い食べ物> = 副食・間食・米以外の食べ物
(hanin-kotrana) ヤムイモ・タロイモ・サツマイモ・キャッサバ・バナナ・
(hani-mainty) ブランテンバナナ・さまざまなムフ(mofu)など

Rô : <おかず>
(laoka) 葉野菜(añana)・マメ類・魚や小エビの干物など

<生存>に基づいた食事の体系 2

Silaoño (mosary) とは?

「飢饉」・「飢餓」の意味を持つが、実際には、<米の端境期>(maitso ahitra)の意味として用いられることが多い。すなわち、<芳しい食べ物>である米を食べることができず、本来は「副食」や「間食」であるべき臭い食べ物>を主食にせざるをえない状態を言う。

あるいは、silaoñoの到来を体感した場合には、北西部の人びとは日常はあまり好まない<粥>(sabeda)を作り、残った米を喰い伸ばすと言う方法をとることもある。

<生存>に基づいた食事の体系 3
<芳しい食べ物> 1

農繁期の出作り小屋における屋食



日常の屋食風景



<生存>に基づいた食事の体系 4
<芳しい食べ物> 2

ハチミツは、養蜂のものも自然状態のものも、双方とも採取する。



ハチミツは、ご飯と共に、神や先祖に捧げることのできる<芳しい食べ物>とされており、養蜂されているハチミツを盗むことは、米や牛を盗むことと同じ犯罪と見なされている。



<生存>に基づいた食事の体系 5
<臭い食べ物> 1

茹でたトウモロコシの実を穂からはずし、これから乾燥させる。北西部におけるトウモロコシの貯蔵法。



畑から帰ってきた女性。頭にバナナを載せ、手にキャッサバの葉を持っている。



＜生存＞に基づいた食事の体系 6

＜臭い食べ物＞ 2

野生のヤマイモ (antadiñy)

「飢饉」(silaofio)の際に、最後に食べる食べ物の一つ。このイモはえぐみが強いので、細かく切り水さらしと天日干しを繰り返してから、そのまま煮るかあるいは臼で搗いて粉にし、バナナなどと混ぜてムフにして食べる。そのまま煮て食べると泥臭く、言葉通りに＜臭い＞。



100

＜生存＞に基づいた食事の体系 7

多様なおかず 1

インド・クレソン (añamafana) 最も日常的に食される葉野菜。



サツマイモの葉の採取 イモを採るよりも、葉をおかずにするために栽培されている。



101

＜生存＞に基づいた食事の体系 8

多様なおかず 2

キャッサバの葉の採取 ravin'mahoño (ravintoto)を作る材料。



樹マメ(antsôtry)の採取 生のまま煮ても、乾燥させて貯蔵しても良い。



102

＜生存＞に基づいた食事の体系 9

多様なおかず 3

吹き矢によって捕獲されたネズミ・キツネザル (vokimbahy)。



犬を使って捕獲されたジャコウネコ (jaboady)とテンレック (trandraka)。



103

＜生存＞に基づいた食事の体系 10

多様なおかず 4

イノシシ猟

捕獲したイノシシ (lambô) の下顎の骨をかけてある。

イノシシは、この写真のように、犬を使って追い込み、槍で仕留める。

イノシシは、畑のキャッサバ、サツマイモ、ヤマイモなどを喰い荒らすため、乾季にイノシシ猟が行われることが多い。イノシシ猟は、猟犬の練度と数とその成果と大きくかわかる。



104

＜生存＞に基づいた食事の体系 11

多様なおかず 5

吹き矢筒 (tsiriky)と吹き矢 (zana-paly) 主として鳥、キツネザル、コウモリを捕獲対象とする。



水鳥のvivvy。写真の個体は、散弾銃によって捕獲されたもの。通常の捕獲には、網・吹き矢・石・パチンコなどを用いる。



105

＜生存＞に基づいた食事の体系 12

多様なおかず 6

昆虫食 sakondry



昆虫食 sahôbaka



106

＜生存＞に基づいた食事の体系 13

多様なおかず 7

昆虫食 tsigisigisy



はしりの雨季の降雨後の数日後に、一斉に羽化する。



107

＜生存＞に基づいた食事の体系 14

多様なおかず 8

乾季の減水期に、池の所有者の許可を得て行われる内水面域の漁。



魚・ゲンゴロウ・タガメ・カメなどが漁獲対象。



108

<生存>に基づいた食事の体系 15

多様なおかず 9

捕獲されたカメ

捕獲された魚



109

<生存>に基づいた食事の体系 16

祖先や神への供物とされると言う儀礼的価値、またく芳しい食べ物>と言う食生活上の価値、そして紛れもない「米食」中心の生活にもかかわらず、北西部の人びとの食事の体系を特徴づけ支えているのは、米ではなく、逆に劣位に置かれているく臭い食べ物>と一括される「副食」ないし「間食」である。なぜなら、米が十分に備蓄されている間、これらの食べ物には「副食」ないし「間食」の位置にすぎないが、米の端境期にはこれらの食べ物が「主食」の位置を占めることによって、この地方の食事の体系が補完されているからである。

このような食事の体系は、どのような土地利用によって可能となっているのか？

110



<生存>に基づいた土地利用 1

Tanim-bary 「水田」: 水稲を栽培する土地。所有者ないし用益権者が確定している。乾季は、牛の放牧地としても利用される。

Taney 「丘」: 昔は、ムラ(fokon'oloña)の共有地。焼畑を行う土地であると共に、建築材、薪、炭、ハチミツ、野生ヤムイモなどを採取する土地。世界観の上では、<森の中>(anatin'ala)と呼ばれ、人間ではない霊(raha)や野生動物(biby dia, biby anatin'ala)の居住する世界に分類される。

Viloño 「畑」: パナナ、サトウキビ、マンゴー、サツマイモ、マメ、キャサツバ、ヤムイモ、トウモロコシなどの多種少量栽培地。牛の侵入を防ぐため、柵がめぐらされる。土地は、相続の対象となる。立地は、平地・丘などさまざま。

Tanin'añana 「菜園」: 河川や池沼の近くの水が入手しやすい土地で、葉野菜(añana)やトマト、葱、サツマイモ、カボチャなどが栽培される。土地は、相続の対象となる。

112

<生存>に基づいた土地利用 2

水田

乾季の風景。

牛の放牧地となっている場所が、雨季の水田。湛水水田でも、畔は毎年造りかえられることが多い。

乾季に水田で牛に草をはませることは、当該の水田の所有者や用益権者で無くとも構わない。



113

<生存>に基づいた土地利用 3

丘

ラフィアヤシ: 葉と葉柄が、編み物の素材や建築材などに利用される。ただし、ラフィアヤシには所有者が居る。

墓もく丘>に設けられる。昔は、丘はムラの共有地。今でも、焼畑以外の利用は、所有者の同意なしに行うことができる。



114

<生存>に基づいた土地利用 4

畑(viloño) 1

この写真では柵の中に、インド・クレソン、樹マメ、バナナが写っている。

この写真では柵の中に、サトウキビ、樹マメ、バナナ、マンゴーが写っている。



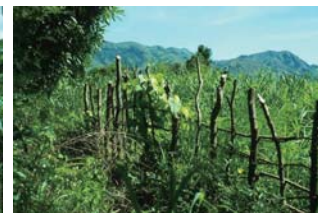
115

<生存>に基づいた土地利用 5

畑(viloño) 2

写真では、バナナとトウモロコシが写っている。畑(viloño)の中には、だいたい6種類~15種類くらいの作物が通常栽培されている。

写真では、畑の柵に栽培されているヤムイモのつるが巻きついている。



116

<生存>に基づいた土地利用 6

畑(viloño) 3

プランテン・バナナ



サトウキビ
粗製糖や酒の原料として利用される。



117

＜生存＞に基づいた土地利用 7 畑(viloiño) 4

＜畑＞は、＜おかず＞と＜臭い食べ物＞、時として陸稲としての米をも供給する土地である。わけでも、＜畑＞と＜臭い食べ物＞との結びつきは強く、「米の収穫量と残量に対応して多様な食物を主食・副食・間食の何れの形態でもとることを前提とした可塑性の高い食生活」は、この＜畑＞の土地利用空間があることによってはじめて可能となっている。

耕作される作物の種類とその面積について、耕作者の意志が極めて強く反映され、それゆえ生産物について高い可塑性を有する耕作地が、＜畑＞と見えよう。



＜生存＞に基づいた土地利用 8

菜園 (tanin'añana)

写真の菜園では、洋葱と小松菜の仲間が栽培されているが、主に村内もしくは市場で販売される。水やりが欠かせないため、菜園は川や池の近くに設けられる。

写真の菜園では、インド・クレソン、小松菜の仲間が栽培されている。葉野菜の他には、トマト、カボチャ、サツマイモなどがよく栽培される。



＜生存＞に基づいたキャッサバ・トウモロコシ栽培 1

キャッサバとトウモロコシは、新大陸原産の栽培食物。キャッサバは一説では1790年にレユニオンから、トウモロコシは18世紀以前にヨーロッパ人の手によって、それぞれマダガスカルに持ち込まれたと言われる。

キャッサバとトウモロコシ共に、ある程度の耐旱性があり栽培が容易で成長が早くまた生産性が高いため、一人当たりの水田面積が減少を始めた北西部地方では、近年栽培面積を拡大させている。

*キャッサバは乾季の食生活において副食・間食として、トウモロコシは雨季の食生活において副食ないし主食として、それぞれ米の端境期を補完する役割が大きい。

＜生存＞に基づいたキャッサバ・トウモロコシ栽培 2
トウモロコシ(tsakotsako) 1

トウモロコシの播種。11月頃の走りの雨季の雨を持って行われる。

手前がトウモロコシ、丘の斜面に陸稲が栽培されている。トウモロコシの収穫期は1月下旬～3月上旬。



＜生存＞に基づいたキャッサバ・トウモロコシ栽培 3
トウモロコシ 2

長所

- 1) 成長が早く、播種から3ヵ月ほどで収穫できる。
- 2) 播種前後に除草すれば良いくらいで、管理に手間がかからない。
- 3) 播種は点播法により、あまり労力を必要としない。
- 4) ある程度の耐旱性があり、病気も少ない。
- 5) 栽培地によって収穫量に差はあっても、あまり地味を選ばない。
- 6) バナナ、陸稲、マメ、サツマイモなども混作可能である。
- 7) 穂を乾燥させるか、実を煮てから乾燥させれば、長期の保存にも耐える。

短所

- 1) 葉は、バッタやイナゴの虫害に弱い。
- 2) 播種から一定期間内に降雨が無いと、芽を出さなかったり、芽が枯れてしまう。

＜生存＞に基づいたキャッサバ・トウモロコシ栽培 4
キャッサバ(mahôgo) 1

キャッサバ畑(viloiño)

キャッサバの収穫。乾季の7月～10月頃に行われる。



＜生存＞に基づいたキャッサバ・トウモロコシ栽培 5
キャッサバ 2

長所

- 1) 気温の高い地域では成長が早く、作付から8～10ヵ月で収穫できる。
- 2) 作付は挿し木によって行われ、土地の耕起以外、あまり労働力を必要としない。
- 3) 病虫害に強く、手入れも挿し木後の除草くらいで、あまり労働力を必要としない(最近他の地方ではウイルス性の病気の蔓延が生じている)。
- 4) ある程度の耐旱性があり、地味をあまり選ばない。
- 5) イモだけではなく、葉もおかずとして利用できる。
- 6) イモの生産性が高い上、乾燥させれば長期保存もできる。
- 7) 一度植えれば、数年に渡って収穫できる。
- 8) 北西部で栽培されるキャッサバは無毒種のため、毒抜きなどの手間がかからない。

短所

- 1) 他の作物と原則混作できない上、キャッサバを栽培した土地にはしばらく他の作物を栽培することができない。
- 2) 栄養学的には、キャッサバのイモにはカロリー以外の栄養がほとんど無い。

＜生存＞に基づいた牛牧畜 1

二週間に一回開催される牛市。

牛市で買集めた牛のキャラバン。



＜生存＞に基づいた牛牧畜 2

役牛としての役割

踏耕・牽や馬轍を曳く・牛蹄脱穀

牽引獣の役割



<生存>に基づいた牛牧畜 3

神や祖先への捧げ物
Tsimihety族におけるrasa hariaña

木の枝にかけられた牛の頭
Tsimihety族におけるrasa hariaña



127

<生存>に基づいた牛牧畜 4

ワクチンの接種



ワクチン接種の際に行われた
mitolon'omy



128

<生存>に基づいた牛牧畜 5

なぜ牛を飼うのか？ 1

北西部地方では、1980年代には村民一人当たり1頭の牛を飼っていたほど、牛の飼育頭数が多い(牧畜民:一人当たりの頭数 3≧)。

- 1) **牛乳?** ⇒ 雨季の頃に牛の食べる草が繁茂している、群れの中に乳離れしていない子牛と授乳中の牝牛が居る、牛乳を必要とする人が居るか買う人がいるなどの条件が揃わないと搾乳しない。また、南部のように酸乳(abobo)として利用することもない。熱帯牛であるゼブ牛は熱帯の気候風土に適応しているものの、乳や肉などについて特化した性質を有していない。
- 2) **肉?** ⇒ 儀礼などの機会に牛を殺した時、あるいは斃死した牛が出た時にはその肉を消費するが、食肉として食生活に果たす役割は小さい。
- 3) **牛糞?** ⇒ 牛糞を脱穀場の床や家の壁を塗る際の連結剤として用いるものの、燃料や肥料として利用することはない。

129

<生存>に基づいた牛牧畜 6

なぜ牛を飼うのか？ 2

- 1) **供犠獣:** 牛はニワトリと並ぶ神や祖先に対して捧げることのできる動物。
- 2) **婚資:** 北西部地方では、現在でも婚資(môletry)として牛が、夫方から妻方に贈られる。これは他の動物で換えることはできない。牛を持っていない時は、牛を購入すると同額の現金を渡さなければならない。
- 3) **役牛:** 稲作における、蹄耕(manosy tanimbary)、犁や馬鍬の牽引、牛蹄脱穀(manosy vary)に不可欠な畜力。また、牛車は最も普及した運搬手段。
- 4) **処分可能な動産:** 二週に一回牛市がこの地方では開催され、売買が盛んに行われている。農繁期を過ぎると高齢の役牛は売り払われることが多い。この地方の住民にとって、牛の売却は大金を確実にその場で入手することのできる貴重な機会となっている。

130

<生存>に基づいた牛牧畜 7

土地利用体系から見た牛牧畜

- 1) 雨季の農繁期、稲作に用いる役牛を除く牛は、山に設けた柵の中の放牧場(kijany)に放牧される。
- 2) 乾季の農閑期、牛は丘や刈り跡の水田に放牧される。刈り入れが終わり、稲穂が脱穀場(valan'tona)の柵の中に置かれると、水田の刈り跡に牛を入れることができる。



すなわち、牛牧畜は、この地方の土地利用体系の中で、特別の空間を要求することがない。とりわけ、稲作とのかかわりにおいて、土地利用として競合することがない。

131

<生存>に基づいた牛牧畜 8

村内では、牛の他にも豚・山羊・ニワトリなどの家禽が飼育されている。



肥育した豚は個体によっては牛の三分の一から四分の一の値段で取引される。しかしながら、雑食性の豚の飼育には、糠・マンガロー・残飯などを与えなければならないため、土地利用の空間として特別なものは必要ないが、牛の飼育に比べてはるかに人手とそのため餌が必要となる。

132

<生存>に基づいた生活の形 1

*村人が一年間生活してゆくにはどれだけの経費が必要なのか？

ムラ(fokon'oloña)雇いの小学校教員の給与

独身の場合: 一年間に粃米50daba(約650kg)

夫婦+子供3人くらいの場合: 一年間に粃米約100daba(約1300kg)

粃米1300kgは、この地方の稲の反収に換算すると、水田約0.8ha~1haに相当する。

∴マダガスカル北西部地方で、大人一人が生活してゆく経費は、**粃米650kg+α**と見積ることができる。その内、自家消費分は、**[(3kapaoka × 365日) ÷ 3.5] × 1.2 ≒ 375 kg**と推算される。したがって、**300kgくらいが換金のために売却可能となる。**

133

<生存>に基づいた生活の形 2

1984年当時、ムラ(fokon'oloña)を構成する成員は、毎年一定量の粃米をムラに醸出した。

ムラは、共同の備品などをかうためにそれらの備蓄米を売ったり、あるいは米の端境期にムラ人に貸し付けたりした。1daba借りたら、次の収穫期に2daba返さなければならないが、この時期の救済措置として果たす役割は大きかった。



134

<生存>に基づいた生活の形 3

米は自家消費されるだけではなく、北西部地方の人びとにとっては主要な換金作物である。しかし、米の端境期を作らないもしくはできるだけ短くするには、米の売却をできるだけ控え、他に売れる物を作り出す必要がある。



- 1) **炭焼き:** 町に持って行けば確実に売れる。ムラ内の決まり(dinampokon'oloña)では、山野での炭焼きは野火防止のため禁止されているが、守られていない。
- 2) **野菜造り:** 野菜や果実は、町の市場に持って行けば確実に売れる。
- 3) **家具造り:** イスや机、ベッドなどを造る村民は多いが、需要は限られている。
- 4) **木材造り:** 角材や板を造る村民も多い。確実に売れるものの、単価は安い。
- 5) **レンガ造り:** 町から7kmの調査村では、村内需要のために主として造られている。
- 6) **ハチミツ:** 確実に売れるが、生産量は少ない。また、近年産出量が減少している。
- 7) **豚・山羊・ニワトリ:** 豚の値が高いが、先に記した理由により飼育頭数には限界がある。また、豚は伝染病により壊滅的被害を受けることもある。
- 8) **toaika gasy造り:** 非合法だが、ドラム缶一杯のもろみで20~25lのtoaika gasyを造ることができるため(白米50kgの価格に相当)、道具を所有しその技術を持っている村民にとっては良い副収入を得る機会となっている。

135

<生存>に基づいた生活の形 4

炭焼き

現金収入の確実な手段であるものの、森林資源の枯渇化を加速化させると共に、野火の火元となることが多い。Gony一袋、2000ariary。

レンガ造り

泥の型抜き、乾燥、積み上げ、火入れなど完成までに一ヶ月を要する。レンガ1個16ariary前後の値段で、家一軒を建てるには最低1万圓が必要になる。薪を大量に消費し、レンガ造りも森林資源の枯渇化を促進している。



136

<生存>に基づいた生活の形 5

養蜂のハチミツの採取
1ℓ 3000ariary。



伐り出された角材 (chevalement)
一本1000ariary。



137

<生存>に基づいた生活の形 6

toaka gasy 造り 1

サトウキビ絞り器



サトウキビを絞って、絞り汁を集める。



138

<生存>に基づいた生活の形 7

toaka gasy 造り 2

サトウキビの絞り汁を発酵させているところ。

発酵が終わった状態。



139

<生存>に基づいた生活の形 8

toaka gasy 造り 3

Toaka gasy造りに向かう人びと。後ろの男性の担いでいるのが冷却に用いる銅管で、この入手が困難である。

蒸留釜にもろみを入れる。



140

<生存>に基づいた生活の形 9

toaka gasy 造り 4

サトウキビのしぼり汁を発酵させたもろみを入れた蒸留釜を加熱する。

水を満たした桶に浸した銅管の中を蒸気が通る間に冷やされ、toaka gasy が抽出される。1ℓ、2000ariary。



141

<生存>に基づいた生活の形 10

非合法的な活動

Jamala (rongony、大麻)

大麻の栽培と所持および吸引は、国家の法律によって禁止されている。しかしながら、北西部地方では古くから大麻が栽培され、マジュンガなどの町に密かに運搬され、売られてきた。乾燥大麻は単価が高い一方、匂いが強いので、大量に運ぼうとするとその匂いによって発見される事が多かった。しかし、最近になって油状にする技術が導入され (menaka jamala)、隠匿性が格段に高まった結果、大麻栽培が広がる傾向が見られる。

Safira fôtsy/safira blanch (白いサファイア)

Safiraは宝石の「サファイア」を指すが、safira fôtsy/safira blanch「白いサファイア」とは、「人骨」を指す。1990年代前半からAmbatondrazaka地方辺りから墓を暴いて人骨を盗む行為が流行を始め、北西部地方でも頻々と墓が暴かれるようになった。実際にその窃盗行為によって逮捕されて収監された人間や、あるいは村人に見つかって殺された事例も出ている。人骨は薬品を造る材料になるとも、あるいは薬毒などの材料になるとも言われ、現金を出して人骨を買う人間が居ることは確かと思われる。

142

北西部地方における在来稲作

雨季 生育中の稲と村と入道雲



143

在来稲作法 1

散播水稲作 1

北西部地方における在来稲作法と農事暦

- 11月～12月 導水路 (hady rano) や堰 (jeky) の整備や清掃。水田の除草 (miava)。
- 1月 踏耕 (manosy tanimbary) もしくは犁による水田の耕起 (mikapa tany)。
- 1月～2月 籾米の散播 (mamafy) ⇒ 半月ほどして水田に導水。
- 5月 刈り取り (mandidy vary) ⇒ おお (tonta) を造って乾燥。
- 6月 稲穂を脱穀場 (valaon'tona) に集め、におを造って乾燥。
- 8月 牛蹄脱穀 (manosy vary) ⇒ 風選 (mangirôko vary) ⇒ 籾米 (vary akôtry) を集め、米倉 (riha) に貯蔵。

※乾季でも水源のある土地では乾季稲作 (vary jebly) が行われるが、調査村落では、雨季稲作 (vary asara) のみが行われている。

144

在来稲作法 2
散播稲作 2

開削中の導水路(hadidrano)

伝統的な堰(jeky)

杭の間に草を詰め、完全に水をせき止めてはいない点に注意。



145

在来稲作法 3
散播水稻作 3

蹄耕(manosy tanimbary)
通常の蹄耕は牛にくびきをかけず、数十頭を用いて行われる。

蹄耕直後の水田における籾米の散播。
1986年



146

在来稲作法 4
散播水稻作 4

有輪の鋤を用いた耕起

耕起と散播



147

在来稲作法 5
散播水稻作 5

散播水田において芽が出た状態。
播種からおよそ一週間後。

苗が伸び、水田に導水しているところ。
水田が傾斜しており、上の導水路から水をかけ流している点に注意。



148

在来稲作法 6
散播水稻作 6

2005年当時の傾斜水田。
在来の散播稲作法では、このような水をかけ流すことのできる緩傾斜地が、水田適地であった。

かけ流した水が集まり溜まる池沼の周囲では、丈が2mを超える在来品種の水稲が栽培された。



149

在来稲作法 7
散播水稻作 7

在来品種の出穂状態
反収は1ha当たりおよそ1t~1.5t。播種から登熟まで5か月。

池沼の周囲で栽培される丈が2mを超える在来品種danga。播種から登熟まで6か月~7か月。



150

在来稲作法 8
散播水稻作 8

在来品種の刈り取り
在来品種は脱粒性質を持つものが多い。また、散播稲作では除草を行わないため、雑草の混入も多い。

写真の刈り取りは、tambirôと呼ばれる、牛や豚を雇って肉料理をふるまい助力を乞う方式をとっているため人数が多い。刈り入れは男性の仕事。



151

在来稲作法 9
散播水稻作 9

刈り取った稲束を掃る作業。
女性の共同作業(asa raiky)で行われている。

刈り入れの終わった散播水田。



152

在来稲作法 10
散播水稻作 10

水田におを造り乾燥させる。
真ん中に立っているのはkosaと呼ばれる、牛を入れることを禁止する標識。

脱穀場内におけるにお造り。



153

在来稲作法 11

散播水稲作 11

牛蹄脱穀
男性の仕事。

牛蹄脱穀

共同作業(asa raiky)によって行われるが、
子供たちははじめ人が集まってくるが多い。



154

在来稲作法 12

散播水稲作 12

牛蹄脱穀後の藁の掻き出し。

にお一山の牛蹄脱穀を終えるには、こ
の作業を4~5回繰り返す。



155

在来稲作法 13

散播水稲作 13

牛蹄脱穀終了直後の脱穀場。

籾米のかき集め。



156

在来稲作法 14

散播水稲作 14

風選(mangirōko vary)
女性の共同作業(asa raiky)。

籾米の村への運搬。



157

在来稲作法 15

焼畑陸稲作 1

北西部地方における焼畑陸稲作法と農事暦

9月~11月 木々の伐採(tetiky ala)。
11月~12月 火入れ(mandoro)⇒籾米の点播(tombohina vary)。
3月~ 4月 刈り取り(mandidy vary)⇒稲穂を脱穀場
(valaon'tona)に集め、におを造って乾燥させる。
4月~ 5月 打ち付け脱穀(mamioko vary)⇒風選
(mangirōko vary)⇒籾米(vary akōtry)を集め、米倉(riha)に
貯蔵。

158

在来稲作法 16

焼畑陸稲作 2



159

在来稲作法 16

焼畑陸稲作 3

籾米の点播を行っているところ。
先を尖らした棒を用いている。

籾米の点播を行っているところ。
小型のangadyを用いている。



160

在来稲作法 17

焼畑陸稲作 4

播種から一週間の陸稲の生育状況

播種から一ヶ月の陸稲の生育状況



161

在来稲作法 18

焼畑陸稲作 5



162

在来稲作法 19

焼畑陸稲作 6



163

在来稲作法 20

焼畑陸稲作 7



164

在来稲作法 21

焼畑陸稲作 8

焼畑を行う土地は、ムラ(fokon'olona)に届け出て承認されれば、その耕作期間に限り用益権を行使することができた。焼畑の休耕期間は、明確ではない。写真のような焼畑の跡地を、matrangyと呼ぶ。



165

在来稲作法 18

焼畑陸稲作 5

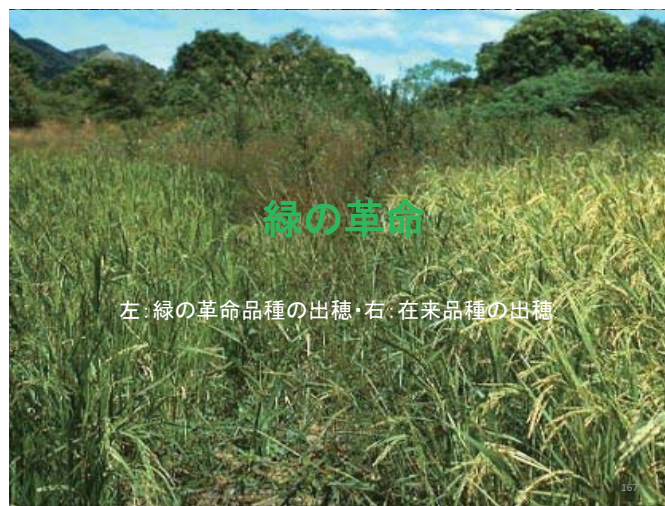
焼畑陸稲作の反収は0.6t~0.8t/haと、在来の水稲稲作方の反収に比べてもかなり低い。それにもかかわらず、移植稲作法と高収穫品種が普及した現在でも、毎年村人の誰かが、何処かで焼畑陸稲作を行っている。



- 1) 焼畑稲作の農事暦は、水稲稲作の農事暦と重ならない。
- 2) 木々の伐採に労働力を必要とするが、この作業は乾季の数ヶ月の間に終われば良い。点播の作業も、移植に比べればはるかに労働力の投入を必要としない。収量が少ない分、脱穀作業も比較的軽作業で済む。このため、労働力は世帯内で充足され、＜共同作業集団＞(asa raiky)は形成されない。
- 3) 焼畑稲作が行われるのは＜丘＞の部分においてであり、そこは水田を開発できない土地である。
- 4) 水稲がまだ収穫できない4月~5月に＜芳しい食べ物＞である米を得ることができ、米の端境期を埋める役割を果たす。

∴ 焼畑陸稲作は、労働力・土地利用・農事暦において水田稲作と競合しない限りで、その長所を最大限に発揮する。焼畑陸稲作は稲作と言っても、＜畑＞(viloño)の作物栽培と良く似た性格を有している。

166



167

緑の革命 1

移植稲作法 1

北西部地方における移植稲作法と農事暦

- 11月~12月 導水路(hady rano)や堰(jeky)の整備や清掃。水田の除草(miava)。
- 1月 犁による水田の耕起(mikapa tany)⇒導水⇒馬鋤(herosa フランス語のherseから)による代掻き。苗代(tanin'ketsy)造り。
- 1月~3月 田植(manetsa vary)。
- 3月~4月 除草(行う人の方が少ない)。
- 5月~6月 刈り取り(mandidy vary)⇒にお(tonta)を造っての乾燥。
- 6月 稲穂を脱穀場(valaon'tona)に集め、におを造っての乾燥。
- 7月~8月 牛蹄脱穀(manosy vary)⇒風選(mangirôko vary)⇒籾米(vary akôtry)を集め、米倉(riha)に貯蔵。

168

緑の革命 2

移植稲作法 2

散播稲作の傾斜水田が、移植のための湛水水田に最近造り変えられた例。



169

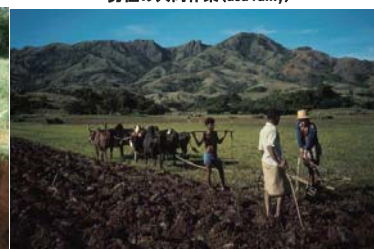
緑の革命 3

移植稲作法 3

導水路の掘削作業。親族による共同作業



有輪の犁を使つての耕起。男性の共同作業(asa raiky)



170

緑の革命 4

移植稲作法 4

陸苗代 立っているのはkosaと呼ばれる立ち入り禁止の標識。



苗取り作業



171

緑の革命 5 移植稲作法 5

田植 1984年当時
共同作業 (asa raiky) によって行われている。
現在と比べるとまだ密植が進んでいない。



田植 1997年当時
手前の女性は買厘い (karamaina)。
密植が進み始めていることがわかる。



172

緑の革命 6 移植稲作法 6

IR-8号の出穂状況(1984年)
この当時の反収は、3t/ha～3.5t/ha。
IR-8号による最高反収を記録していた頃。



IR-8号の刈り取り(1984年)
この写真では、兄弟の共同作業 (asa raiky) として行われている。



173

北西部地方における稲作の阻害要因 1

- 1) 土壌流出: この地方では阻害要因として語られたことがない。
- 2) 低温: この地方では阻害要因として語られたことがない。
- 3) 日照不足: 稲の生育についてはその影響の語られることがあるものの、収穫の大きな阻害要因とは認識されていない。
- 4) サイクロン: 内陸に位置するため風水害の被害は少ない。むしろ、サイクロンは確実な降雨の機会をもたらすものと考えられている。一方、茎の柔らかい新しい品種には、風による倒伏の恐れがある。
- 5) 鳥害: 山間部の水田では、スズメ (fody) などによる被害がかなり深刻で、登熟期には監視人を置かなければいけない場合もある。
- 6) 虫害: バッタ (kojeja) とイナゴ (zanamendry) が、1999年～2000年をはじめ時折大発生し、食害が深刻化することがある。人手によって駆除を行う。
- 7) 病虫害: 国際稲作研究所 (IRI) による高収品種 IR-8号、IR-12号、IR-16号の普及に伴い、mavobe (双翅目の幼虫が稲の茎に棲息し、苗を黄変させ、最終的には枯死させる) が蔓延。殺虫剤の散布もしくは水田に油を投じ、成虫を叩き落として溺死させる方法で対処することになる。

174

北西部地方における稲作の阻害要因 2

8) 旱魃 (paiky): この地方で一番の稲作の阻害要因と語られるのが、降雨不足もしくは旱魃である。2000年には、平年の三分の一しか降雨が無く、収量が平年の三分の一から十分の一だったと言われている。

写真は、2006年の水田である。2005年～2006年の雨季も降雨不足がはなはだしく、耕起はしたものの、苗の植え付けをすることができずに終わった部分が手前半分に広がっている。



175

北西部地方における稲作の阻害要因 3

9) 耕地不足: 北西部地方の人びとは、動産・不動産について男女均分相続をとっている。そのため、年3%近い人口増加が続いている中、次第に一人当たりの水田面積が減少している。その一方、村内において彼らの技術で新しく開拓できる水田はほぼ無くなっている。そのため、この写真のように比較的浅い池沼を新たに耕起したり、水田の縁の土地を削ったりして、少しでも稲の作付面積を増やそうとしている。



176

北西部地方における稲作の阻害要因 4

一人当たりの使用できる水田面積が減少すると共に、水田の相続争いや境界争いも増加している。写真は、ムラの立会の下で、水田の再割り付けを行っているところ。

元来が散播稲作で湛水田を造らなかったこの地方では、畔ではなく写真の草叢 (vero) が水田の境界となっている。これを新しく設けたり、移動させるにはムラの立会が必要である。



177

北西部地方における稲作の阻害要因 5

野火 (mötro kiaka) の消火は、村人総出の作業。故意であれ失火であれ、火元の人間が判明した時には、最高10万ariaryの罰金が科せられる事もある。



野火は乾季に発生するため、水田の稲に直接被害を与えることはないが、脱穀場内におが被害に遭うこともある。



178

緑の革命の帰結

田植えの終わった水田
(2005年2月 密植が進んでいる)



179

緑の革命が北西部地方にもたらしたもの 1

わたしが最初に北西部地方で調査を行ったのは、1983年8月～1985年2月である。一方、この地方に「緑の革命」の農法と品種が導入されたのは、1970年代後半である。したがって、「緑の革命」の導入直後から、その普及と取捨選択過程を見てきたことになる。北西部地方における「緑の革命」の帰結は、以下の通りである。

- 1) 高収種の魅力: 北西部地方の在来品種の中でも、品種によって反収に差のあることは、つとに認識されていた。しかし、その他のそれぞれの品種が持つ特質、播種から登熟までの期間、丈の高さと茎の硬さ、生育過程における水の必要度、病虫害への耐性、食味などと併せて、総合的に判断される性質のものであった。そのため、1983年～1985年時点での調査村落において栽培されていた稲の品種は27種であった。これに対し在来品種の倍以上の反収を示したIR-8号の登場は、この地方の人びとに反収の高さだけで品種を選択する初めての経験となった。

180

緑の革命が北西部地方にもたらしたもの 2

2) **集約的労働力投入稲作の採用**: 在来の散播稲作法において最も集約的労働力を必要とする作業は、稲刈りであった。なぜなら、在来品種の多くが登熟すると脱粒する性質を持っていたからである。これに対し、緑の革命は品種だけではなく、移植稲作と言うこれまでに全く無かった稲作方法を伴っていた。これにより、畔の設営、馬鍬による代掻き、苗代の設営、田植と言う労働力投入の作業が、新たに加わった。とりわけ、田植はこの地方の人びとによってもきつい作業 (asa mafy) と認識されている。それにもかかわらず移植稲作法が受容された理由は、**その反収の圧倒的高さと共に、彼ら自身が人口の増加と水田面積の狭小化を予期し、また現金の必要性が高まった結果、米以外に有力な換金作物の無いこの地方における米増産の欲求も高まっていた点にある。**

⇒移植稲作導入直後は、散播稲作法と同様、田植も共同作業 (asa raiky) の対象となっていたが、水田面積の違いによる労働交換の不公平感が噴出した結果、**田植は共同作業の対象から除外されることとなった。**

181

緑の革命が北西部地方にもたらしたもの 3

※共同作業 (asa raiky) : 一連の稲作の作業過程を世帯 (tokantrano) を単位とした労働力の交換によって行うこと。労働力の交換が果たされるのであれば、どの世帯とまた幾つもの世帯とこの共同作業を行っても良い。

⇒田植えが共同作業 (asa raiky) の対象から外されたことにより、各世帯は田植えのための労力を何らかの形で調達せざるを得なくなった結果、**賃雇い (karamaina) が急速に増加した。**それだけではなく、それまで日当であった田植え作業が、**5m×5mのカレ (carré) を単位とする作業へと変わり、またそれにより子供も大人と同じ賃金 (karama) を手にすることができるようになった。**

182

緑の革命が北西部地方にもたらしたもの 4

3) **高収穫品種栽培の落とし穴**: 北西部地方への緑の革命の品種と移植農法の移転と普及は体系だったものではなかったため、村人による「見よう見まね」の部分が多かった。その結果、**無施肥で高収穫品種を栽培し続け、種子の更新も行われず、密植の傾向も顕著であった。**1980年代には、多くの村人が「肥料」(zezika) と言うマダガスカル語を知らなかった。今でも、有機肥料の作り方は、ほとんどこの地方の村人には知られていない。

⇒Mavobeをはじめとする**病虫害の蔓延。**

⇒**反収の減少。** 3t~3.5t → 2t前後。

⇒高収穫品種に共通する**丈の低さと茎の弱さ。** → 村内の多くの水田において栽培できず。

⇒**水ストレスに対する弱さ。** → 旱魃のみならず、雨季が早く明けた時も、大幅な減収になる。2000年の旱魃において広く認識される。

↓

1990年代後半には一時IR-8号、IR-12号、IR-16号の高収穫品種によって村内で栽培されている稲の品種は席捲されたものの、その後**高収穫品種に対する見直しが始まった。**

183

緑の革命が北西部地方にもたらしたもの 5

4) **田植えの長期化と雨季明けの危険**: 世帯内の労働力が少なく、また賃雇いするだけの資力の無い世帯では、必然的に田植えに要する時間が長期化し、3月に入っても田植えを行っている世帯は珍しくない。その一方、3月の降水量は年によって大きく異なり、この傾向は近年著しくなっているとされる。その結果、2000年の旱魃を契機に生育期の水ストレスに強く反応する高収穫品種の弱点が広く認識されるにつれ、高収穫品種離れが生じた。

↓

世帯内の労働力を増大させて田植えを早く終わることが難しいのであれば、**できるだけ3月の不安定な降雨による水ストレスを受ける確率を減少させるために、成長の早い品種、早生種、を多くの村人が求めるようになり、播種から登熟まで3カ月の早生種も導入されることとなった。**

184

緑の革命のその後 1

1) **品種の多様化と在来品種の回帰**: 高収穫品種偏重が薄れると、早生種の導入の需要が高まった一方、村人それぞれの稲の性質に対する欲求がさまざまに表れるようになった。その結果;

⇒村人が他所の村や他所の土地に行き、そこで自分の村で栽培されていない稲の品種を見つけると持ち帰るようになり、栽培品種数が増加している。そのため、品種の名称通り、それぞれの品種が異なるのかどうか、村人でさえわからない事態も生じている。

⇒反収が低い、播種から登熟まで時間がかかると言う理由で、湛水田を造ることができない土地であることや食味の点で在来品種を栽培し続けた人たちを除き、高収穫品種の受容と共に在来品種離れが一時急速に進んだ。しかし近年、**耐乾性、病虫害に対する耐性、茎の強さ、丈の高さと言う在来品種の長所に目が向けられるようになり、在来品種を栽培する村人が増加し始めている。**すなわち、**高収穫品種も、その性質を考慮して選択する品種の一つにすぎなくなっている。**

185

緑の革命のその後 2

北西部地方における品種選択の推移は、多品種栽培の「**危険分散**」を否定している。もし、高収穫品種が病虫害にも強く、水ストレスに強く、丈が高く、茎が固くそして食味が良かったならば、他の品種は栽培されていなかったにちがいない。その一方、栽培者自身が品種を選択してきたことは、内部抑止力を生じせしめ、迅速な品種の転換を可能としている。

2) **散播かけ流し水田の復活**: 高収穫品種の受容と共に移植稲作法が導入されると、湛水田を造営するのに適した低地の水掛かりの良い湛水田 (hoba) が水田の立地上の適地となった。その結果、傾斜のきつい湛水田に造り変えることの難しい在来のかけ流し水田は、耕作が放棄される傾向にあった。しかしながら、湛水田を造営できる土地あるいはそれに造り変えることのできる水田が枯渇してくると、依然として湛水田における移植稲作を耕作の主としつつも、労働力の投入が少なくて済む散播かけ流し水田における耕作を再び始めるようになっていく。とりわけ、田植えが終わり、3月に入っても降雨が見込める場合には、3月になってからかけ流し水田を耕起し、散播する傾向が生じている。

186

緑の革命のその後 3 条植えの導入 1

ここ数年、一部の村人たちは、**条植え法 (ketsa ligne)** を導入し始めている。

条植えを行っているのは、まだ村人の1割にも満たないものの、それによる反収の増加が、次第に広く村人たちの間で認められつつある。



したがって、今後条植えは普及してゆく可能性がある。一人当たりの使用できる水田面積が狭小化してきている現在、集約的労働力投入の方向で増収を図る局面が訪れている。

187

緑の革命のその後 4 条植えの導入 2

条植えの刈り跡の拡大写真。
条植えを行っても密植傾向は根強い。



手前が通常の移植水田、向こう側が条植えの移植水田。共に密植傾向が認められる。



188

緑の革命のその後 5

3) **水田を持たない村人の出現**: 現在、調査対象の村落では、2人の村人が、自分が用益権を持っていた水田を売却してしまっている (相続水田の売却には、当該の水田を開拓した人間からその用益権を継承した全ての子孫の同意が必要)。1人は村を出て行き宝石の採掘に携わっているが、1人は依然として妻子と共に村に居住を続けている。村内に居住を続けるその男性は、農繁期に他の村人から水田を借り受けたり (fandro)、山から木を伐り出して製材して板を売ったり、あるいはハチミツを売ったりして生活している。この男性の水田売却について他の村人たちは、「これから先どうやってこの村で生活してゆくのだろうか?」と非難の言葉を口にしながら、相続水田を売却したことそのものに対してはとりたてて批判をしていない。

⇒**北西部地方の景観は、「水田稲作農村」の様相を呈しているが、北西部の人びとにとって、水田稲作も祖先から受け継いだ生活様式の一つでしかなく、その土地で<生存>してゆくことの結果でしかない。**

189

緑の革命のその後 6

北西部地方では、白米>赤米に価格差があるだけで、売買の際に品種が区別されることがない。マジュンガ市内の米の小売商の店頭にて。



マジュンガ市内の米の小売商の店頭にて。質によって二種類にしか区分されていない。ちなみに、マジュンガ市内で北西部の米は、牛蹄脱穀により小石などの混入が多いため、最下等に位置づけられる。逆に、Marovoay平野で獲れた米が、最上等である。



190



多生業性とく生存>

Antafiangaの週市

多生業性の世界 1

農学者 杉村和彦:「アフリカの農耕社会における生業の「多生業性」という現実とは、農耕に加えて農耕以外の生業も行われているという付帯的なものではない。掛谷が指摘するように、**アフリカ農民の生業特性は、むしろ農耕に深く特化せず、多面的に自然を利用する兼業形態の中に、いわばその本領が隠められること**なのである。それゆえその生活のリアリティに迫るためには、先進国で農業を出自とするような**専業**を前提としてきた**農業者像とは異なる**。アフリカ小農世界の**多生業**こそを本領とする生業イメージを再構成していくことが必要なのである」[杉村 2004『アフリカ農民の経済 組織原理の地域比較』世界思想社:75ページ]

調査地の人びとの主たる食料および主たる現金収入の双方が、米および稲作である。村人たちは、「自分たちは稲を作っている」、「稲作が自分たちのヴェルンテンガ(生活)である」と語っている。それでもなお彼らは、「**稲作農民**」ではない。なぜなら、**稲作は彼らが生活する土地において多数存在する資源利用の一つの形態であるに過ぎず、稲作以外の条件が揃うならば何時でも他の資源利用方法へと活動の重心を移動させる可能性を、彼らの「生存」(ヴェルンテンガ)は常に孕みながら成立しているからである**。魚の漁獲と売買、ハチミツの採集と売買、酒の製造と売買、レンガの生産と売買、家具の製造と売買、衣料品の仕入れと売買など、このような活動が生計の主たる部分を占めている世帯、あるいは一時生計がそのような状態に置かれる世帯は、村においてもなんら珍しいことではない。したがって村人たちにとって**水稲栽培と水田耕作は、「ツィミヘティの祖先からの習慣」(fomban-drazana Tsimihety)ではあっても、子々孫々伝え残されるべき家業でもなければ家産でもない**。「水田稲作農民」とは、現時点における村人たちの土地利用に対する判断の結果が、示されているにすぎないのである。

192

多生業性の世界 3

なぜ熱帯地域の農耕生活においては多生業性が高いのか？

- 1) 熱帯雨林の生態系そのものが、多種少量種から構成されること。
- 2) 熱帯雨林では、激しい降雨のため土壌に養分が蓄積されず、植物体の形で地上に蓄積されていること。
⇒熱帯地域で単一種ないし少量品種の作物を栽培し続けることには、病虫害、連作障害などの危険が高い。
- ⇒唯一の例外が、水稲稲作である。稲は熱帯原産の植物であり、また土壌よりも、水から養分を多く得ている。
- ⇒熱帯における焼畑農耕では、混作が基本である。
- ・水田稲作を生活の中心に据えつつも、さまざまな土地資源を利用することが、壊滅的生存の破綻を避けると共に、その土地に長く生活してゆくことを可能とさせてきた。

194

多生業性の世界 4

なぜ森林/自然資源が枯渇しつつあるのか？

- 1) コモンズとしての持続的共同利用法が確立されていなかったこと。
⇒マダガスカルは長いこと極めて人口の希薄な土地であった。
- 2) 霊や動物の世界である<森>を切り拓くことが人間活動の証しであるとの基本的思考の存在。
⇒野火を放つ理由の一つに藪などに棲む<霊>を追い払うことがある。
- 3) 熱帯の生態系の脆弱性に基づく多種少量栽培の考えが、多生業性として生活のさまざまな側面に及ぼされたこと。
⇒樹木をく栽培する>と言う考え方が無い。
- 4) **水田稲作の普及と依存**。
⇒水田稲作を行っている限り、森林資源に注意を払うことなく、その土地で生活できたこと。
- 5) 現金需要の高まり。
⇒ムラ人誰もが入手できる資源へのアクセスの集中。

195

多生業性の世界 2

北西部地方における週市
Antafiangaの週市

商品活動が活発化した結果、北西部地方では写真のような週市が開催される場所が増えている。このような市に出店しているのは大半が同地方の人びとである。写真の市では、衣料品の売買取りだけでなく、村人が米、粗製糖、タバコ、ハチミツ、魚、トマト、莫産などの地産品を売りにやってくる。



193

終

走りの雨季の雨が上がった朝の村



195